

紅葉先生 此ぬしの玉稿一卷謹て
 拝見いたし候予ては障子紙に御認め趣
 あひつたへ候がさはなくて其の如くに
 継ぎたるを慥く御つかひありし事
 まのあたり相わかり申候さて特に此の
 一篇はたゞ六日七日ばかりにて成就
 遊ばし候よし承りおよび申す処なり
 なに、つけても襟の正され申候

大正八年六月吉日

鏡花

謹識

まくら あ ばり けふとなり ねえさまき

枕を上げて、老女、今日も隣の姉様来

家

たまひしに、兄様はなせいづもの様にお逢
 にいさま やう あひ

ひなさ ■れといへば、俊橘頭を撫で、流石
 しゅんきつかしらなさすがに

いま ことば きのごく 我
 に今の言葉は気毒なりし。われもとより

これしきの事を根に持つはあはれぬぞ
 いたいぬ はもたぬぞ、

をんな じやする深し。 おい

あの女は邪推ものなりさりながら怒り
 子

かへ
て帰りたりとあれば、其儘に棄置け。
そのまゝ すてお

ばちや
いれ
老女茶を煎ぬかといへば、あのお子不敏と
おこおびん
娘

おぼ
おみまひ
をり ひらき ひとくち
覚さば、その見舞の 折を開き、一口なりと

めしあが
ねんぐわんとど
たりとて
■ 召上りたまはゞ、念願届きてどれほど

よろこ
し ころろ かた
か喜びたまふか知れず。心に懸けて四折
ての

しな
よをり およべるを、そのまゝつみかさ
の品々四折にも及びたるを其儘積重

(掲載箇所 ここまで)

て
いまもど
る
ね、手をつけて今に戻してくれ するなど、
ぐわんい

さる頑固はおほせられぬものなり。せめては
是
めしあが うま ひとこと われとり
之なりと召上り、甘しとの一言 ■ を我取

つぎ
娘
きかせまう
次ぎてあのお子にお聞か申したしと
ばか
とくし
いへば、馬鹿をいふな されどさほどの志ならば
篤

く
はり
張かみみ うま
喰ふてやらむ。札紙見て甘かるべきものを

もち
ちよん
だいに
きんせい
女子大厭忌
持て来よと、磊々落々の大丈夫もの

ぬぢやうふ そのすがた そのいろ
偉丈夫も、其姿にあらず、其色にあら
そのなさけ ■ わは ■

ず、其情にはつゐに和らぎかゝり、す
ひとをりじぶんひとり
舌打ちしすかすてら一折自分一人して

しちぶ くら
■七分は喰ひぬ。

あくるひがくかう かへつくぬいつよう ふみ
明日学校より帰れば、机に一通の書翰

29

み おぼえ しゆせき すじふにん
あり。見 ■ 覺なき手蹟、しかも数十人
はういうちゆう のうじよ
の朋友中これほどの能書はなきはづ

なになに
うらがきみ れど何もなきを
と、裏書を見れば市内龍子とあるは

いぶか ふうき よ
■を訝りながら、封切りて読めば、
さいしよしゆんじびやうき たづ あつとき
最初に俊次の病気を尋ね、熱き時 侯

カ きず あし ほやうだいじ
■年は負傷に悪しければ保養大事と
むね したゝ 半 ■ 半 ■ 半 ■
諱の旨を認め、半はより、昨日は留守

行 はし なく言 ■ ■ ■
に來りきて 不 ■ たなくも不敬の言葉
参りて ことば

く て き言葉の ことば
を悔いたりゆるしくれとの事なり。

ばつびつ われひやくどせんどかよ
末筆に、我百度千度通ふとも、とても

■ 連 ■ きふ さと

■逢ひたまふまじきを昨日暁りたれば、

無益の
むえき

あしぶみおもひとま しゆんじ びやうき
足踏は思ひ止りつれど、俊次の病氣

対あ